

意
外
錄

はしき

前年、人に頼まれて意外に思ふことを百則書き「意外録」と名づけたことがある。一時の戯筆で、今見れば穢氣が満ち、餘程取捨しないと物にならないから、可なり書き換へて見たが、どうもおもしろくゆかぬ。元來、意外などいふことは、極端にいふと神秘的のことの外に無い筈で、どんな事でも少しく考へると、相當の解釋もあり理由もあつて、意外が意外にはならない。萬有の内に不可解の事も、多くは理學の研究で解を得て來ると、不思議でも奇蹟でもないことになる。意外は蒙昧無智の者の感ずることで、意外に感ずることが多ければ多いほど、其人の蒙昧無智を甚しく告白するのだとも云へよう。私の所謂る意外といふのも、實は無智の告白に近いものかも知れんが、初度の直覺で案外に感ずることは、誰れにも無いわけではない。それが人の興味をそゝるものであることも、人の許す所である。但だ常經を外れたことが案外の思を爲すものであるから、人の行爲などに涉つては、たとひ興味があつても遠慮せねばならぬことが少なくない。私が初稿を多く塗抹したのも此故である。餘りに斟酌に過ぎては現存の

人のことなどは何も書けぬことになるが、もとゞり譏誣の惡意などのあつての事でないから、さうまで遠慮は無用と、いくらか塗抹を見合はしたものもある。勿論、案外を感じる事物の範圍は極めて廣い。或は人の行藏として現はれ、時によりて社會の活ける事實として顯はれ、或は既に埋もれ果てた歴史的事實として、又は眼前の人、乃至事物の隠れた半面として現はれ、更に或は巷閭一片の月、そこに未顯の李杜の輩の巢うてゐたことを紹介することも絶無と限らぬ。要は意外なる其處に興味があるのだ。但だ私の意外とするものを、人が意外とせぬものもあらう。數多き私の話の内に強ひて意外とコジツケたやうなものも或はあるかも知れんが、それは淺學寡聞の致す所と一笑に附されたい。

一 無ささうだが

刀圭界の巨擘であつた故青山胤通博士が、國學者で名高い平田篤胤の流を引く平田鐵胤かねたねの養子になつたことがある。胤通の「胤」の字は蓋し其の名残りであらうが、此の事實を知らない人は、後藤新平子が、嘗つて醫者であつたことを聞いて意外とすると、同じ様に意外とするも

のもあらう。元老として唯だ一人存してゐる西園寺公望公が風流の人であることは誰れも知つてゐるが、あの人が琵琶を弾ずるの名人で、明治天皇の御在世中、時に召されて琵琶を弾じたと聞かば、人或は意外に感ずるであらう。併し又西園寺家がもと／＼琵琶の家筋であると知らば、意外とすべきでも無からう。懸河の雄辯の持主であつた島田三郎氏が、生れて三歳位までは啞の如くで言語を發し得なかつたとは、氏の親友田口卯吉氏の談であるが、意外と云へば意外だが、大いに鳴かんとするものは先づ黙すると思へば意外とするにも足らぬか。大江丸と云へば名高い俳人であるが、其の三代大江丸が掏賊の親方であると云へば、意外の感に打たる、であらう。更らに此人に金石癖があつて、長く名家の墓碣の探究に没頭し、十二冊の著書があると云うたら、益々意外に感ずるであらう。そして意外にも此人は逮捕に就かず病歿した。此人の事は余が「春城隨筆」にも收めて置いたから参考されたい。ここに又意外といふことに合格しさうな事實がある。乃木將軍の父、十郎翁が會つて病んで、醫師の診察を受けた時、醫師は、此病には房事が尤も害になるから戒めよと注意した。翁は唯々として去つたが、其後二年も經て醫師を訪うて云ふには、先年御注意により房事を廢して今日に至つたが、尙ほ今後

も廢して居らねばなるまいか。實はモウこれ以上禁じて居ることは迷惑に思ふと云うたので、醫師は大に驚き、實は當分の積りで申上げたのであつたが、二年間も固く守られたのは御氣の毒であつた。併し出來難いことを能くも長い間守られたと、心から感服して詫びをいうたのであるが、此父にして彼れが如き將軍を生んだのは意外ではない。

二 解剖社から兵法の大家 藤公看護婦に招かる

大阪に緒方洪庵を中心として解剖社といふを設けた事がある。その創立は天保十三年で、それから二十年間、毎年一二次、町奉行所より刑屍を申受けて解剖を行つた。緒方の書生は皆解剖に熱心であつたが、中に尤も此事に熟練の門人があつた。それは村田藏六^{むらた ざうろく}というたが、意外にも此人は後に大村益次郎と改名し、明治維新の際には兵部大輔^{ひょうぶ だいほ}の要職に在り、兵法の大家として崇められた。その銅像は、現に九段の靖國神社の境内に建つてゐる。

伊藤春畝公に愛された亡友長田秋濤が、公に就て意外の事を語つたことがある。公は病中看護婦に戯れた悪縁から、看護婦の自宅へ招かれ、それを拒むことが出来なかつた、と云ふが

椿事のアラ筋である。秋濤のいふには、ある時、伊藤さんが僕を連れて花屋敷の常盤で飲んで居ると、或る女が面會に來た。それが誰かと思ふと例の看護婦である。伊藤さんの云はれるには、これから席を改めて飲むことにしようと言はる、から、どこへ行かる、のかと聞いて見ると、看護婦の家へ行くのだと言はる、ので驚いたが、往つて見ると、九尺二間の、狭くするし小路にある家で、ドウ云ふことから知れたか、伊藤さんが見えると云ふので、此九尺二間の家の前に見物人が群集してゐた。それを構ひつけないで平氣で伊藤さんが酒を飲んで居る様子は、ドウしても東洋的豪傑であつた。……

三 キ印にされた勝伯 異境に持てた省亭

勝伯と云へばなかくの通人であつた。その人が餘り通を利かして却つて失敗したことがある、そしてそこに意外がある。伯自身の談に、今の吉原は誰れでも金さへ持つて行けば何んな花魁でも買へるが、昔は先づ茶屋へ行つて相談し、茶屋から花魁へ願はなければならぬ。謂はば花魁に買はれる様なもので、時によりては願意相叶はぬ事もある。そこで我輩も若い時、全

體花魁に振られるなどと云ふ事は、男子としての耻辱だ、乃公は一番惚れさせてやらう。それには狭い肌が必要だと思つて仕事師の扮装で出掛け、三つ布團の上に大胡座をかき、胸を寛ろぎ、腕組をして花魁今や來ると待ち構へてゐた。すると障子を細目にあけて見て、又締めて去つたが、扱て朝になつても來ない。肝積でたまらず、茶屋を呼んで談判をして、茶屋から花魁に問うて見ると、アレはキ印だから駄目だとの挨拶で、我輩折角の意匠もメチャクになつたとある。

勝伯とは反對に艶福を得たのは畫家の渡邊省亭である。此人生粹の江戸ッ兒で、西洋趣味などの無い人だが、往年西洋に遊んだことがある。其時洋服の代りに法被を着て出かけたと云ふも奇である。言語は無論分らず、其上異様な風をした肥大の男が西洋美人に惚れられたと聞いてはチト意外である。何れ悪所に入出した出來事であらうが、一夜房中に居ると戸外に誰か窺ふ者がある、女は之を叱すること再三に及んだが、尙ほ立去らぬ處から、女は遂に短銃を取つて之に擬したので漸く去つた。此の戸外の者は前の情夫であることが分つたが、それに短銃を擬する迄に、此法被先生、金髮美人の心を挿へた手際はエライものだ。

四 裸體應接の二幅對

茲に又意外な應接とも云ふべき一話がある。會つて法官中に富永冬樹ふゆきといふ人があつた。此人は大の拗ねもので、いろく奇行が多かつた。處が此奇行家が先を越されて一驚した話がある。或時富永は勅任判事巖谷龍一を訪問した。玄關番の案内につれて行くと、色々の部屋を通り、廊下傳へに臺所の方へ導かれた。妙な處を引張り廻すものだと思つて居ると、やがてこちらへと云ふから這入つて見ると、此處は浴室である。時に主人の巖谷は今し入浴中で、マア此方へるらつしやいと云ふので、富永もイキナリ衣類を脱して飛び込み、一浴して赤裸せきの主客初めて一禮し、引續き主人は手を拍つて、裸體のま、茶を進めたのには、流石の富永も辟易した。

裸體の意外が今一つある。私が石渡敏一氏と共に統計學者の杉亨二翁を神田の邸に訪うたことがある。座敷に待たされて三十分程経つても主人が出て來ないので、待ちくたびれてゐると、縁側に足音が聞こえて、突如私等のゐる處へ這入つて來たのが主人で、それが全裸體で、

陽器がプラ／＼してゐるのに一驚を喫した。翁は極度の近視眼で、私等の座敷にあることを知らず、入浴を済まして出で來り、そこを通り抜けて奥へ行かうとしたのであつた。

五 君子の好迷 お鼻さん

茲に又石黒子爵から聞いた意外な話がある。中澤雪城と云へば卷まき養湖の門人で、書道に於て一時名聲が高かつた。石黒子爵も曾ては其の門に入られた事がある。子の云はる、には、自分は惡筆だが、師匠は天下の名人である。自分が雪城先生の食客とならうとする時、先生が書物は若先生に習ふがよいと謂はれた。其若先生と云ふのは川田養江博士の事だと聞いて、先づ意外に感じた。但し川田は養子になつて間もなく離縁したから、自分の外に養子になつた事實を知つてゐるものは少ないと云はれた。夫から雪城の細君に就て左の如く語られた。雪城先生の細君は中國筋の或驛の妓であるが、此女は賤業者には珍らしく好く婦徳を守つた。先生が此女を娶つたには一笑話がある。元來先生の或部分には人並外れた大物があつて、折に觸れては無遠慮に出して我々に示して戯れたこともあつたが、斯様な譯から如何にしても匹敵すべき配偶

に乏しく、是には先生もホト／＼當惑し、長崎へ至る迄の驛々に妓に會して物色し、合格したのが僅かに三人に過ぎなかつた。即ち後に正室となつたのが此三人中の一人であつたと。これも意外の内に加へてもよからう。

話は變るが、一つの官能が或る物に専らになると非常に其部分が發達する。私が往年北海道に旅行した時、札幌麥酒會社で眼前に見聞した實例がある。麥酒製造工場では、空罎を買ひ集めて掃除して用ゐるが、之れを掃除するに當つて第一に必要なは、石油と酢の礬を先きに分けた上でなくては洗ひない。そこで多數の工女に一本々々づ、嗅ぎ分けさせるのだが、一日怠慢なく嗅いでも普通二三百本しか出来ぬ。然るに此に一人特別の者がゐた。之れは三十歳位のお花と呼ばれる、女であつたが、此女に限つて、廣い場所に何百本を集めて置き、立どころに嗅ぎ分けて、アレコレと指摘する。そして百發百中誤つた事がないと云ふ。そこで「お鼻」と譯名なまなされて調法がられてゐた。

六 ナブキンの上に贈與の勳章 中島信行の議場整理法
物々しい重器扱ひ

爰に又意外な勳章の贈り方がある。勳章の贈與は何れの國でも嚴かな形式に據るものであるが、長田秋濤が伊藤公に隨從して歐洲漫遊中、西班牙の宮廷に招かれて一夕の宴を賜つた時、一同食卓につくと、意外に感じたのは、銘々のナプキンの上に金色燦爛たる勳章が置かれてあつたことで、國王の姉妹に當らるゝ内親王達は、花をも欺く麗質に眩きまでの盛装を凝らし、氣輕に外賓の間に斡旋して、お手づからナプキンの上の勳章を取り、銘々の胸間に挿まれたのは眞に愉快を覺えた。此の贈與の法は如何にも氣が利いてゐて趣味深く感じた^と聞いたことがある。勿論、勳記は式の如く授與することになつてゐるさうだ。

衆議院で議長をつとめた人の内で意外な態度を持した人は、中島信行氏であつたとは林田雲梯氏からいつぞや聞いたことである。あの頃の書記官長は曾根荒助子であつたが、議場が混雑を生じて來たり、議論が沸騰して來ると、議長中島は瞑目して天を仰いで黙つて仕舞ふ。書記官長が氣を揉んで腕でコツ／＼注意しても、宛かも知らざるもの、如く、ます／＼落付拂つて顧みない。それで一日中島に、曾根から此事を言ひ出すと、中島の言ふには、盤根錯節に當つて自分の力で治め難いときは天帝に請うて治めるより外仕方がないと、即ち中島の瞑目して居

る時はいつも天帝に訴へて居る時であると云ふ事が、その時始めて分つたが、此議長には書記官長も大いに困つたらしい。

幕末に前島男爵は英學の教師として薩摩藩に迎へられたが、其頃一藩の師範といふと、鄭重に待遇されたもので、ある時藩の重器を特別に見せるから、出頭せよとあるので、男も禮服をつけて出ると、藩の重役から厳めしく、貴殿は外國の語學の師範であるから、特別に外國より寄せられた大切のものを御覽に入れると挨拶があり、一二の侍が恭しく持出す物を見ると、塗り箱に入れたもので、其の箱を開くと、また桐箱があつて、それをひらくと、錦欄の裂れに包まれたものが出ると云ふ工合に餘程の重器であるらしく、男も何であらうか、可なり重量のあるものだが、といろくく想像もしたが推測しかねてゐると、やがて現はれ出たのを、恭しく推し戴いて拜見すると、意外も意外、それはウエブスターの字典であつた。薩摩で外國から此の寄贈を受けた頃は珍らしいものでもあつたらうが、男などには熟知のもので、こんなものなら特に拜見するでもなかつた、と一笑したとある。

七 異彩ある博徒の親分

讃岐で乾兒こぶんの二千人もあつた博徒の親分に、詩書を能くするもの、あつたのも意外だ。それは日柳くまざら燕石である。私が最初此人の名を知つたのは、明治以後の勤王家の詩集を獄中に見て、楠公を詠じた詩が面白いと感じて其氏名を知つたが、しかしその人の素姓などは知らなかつた。然るに其後此人は會つて高杉晋作が遁竄中に救つたものだど知り、且つ此人が讀書家で、高杉も三舎を避ける人物である事を高杉が友人に贈つた書狀で知り、意外に思つたが、此人が勤王の爲めに維新の際力を盡し、終に其筋に知られ、戊辰北征の時總督官の記室となり、我が郷里越後へ來り、病歿して碑も亦我が縣にあることを聞くに迫んで、益々案外に感じた。

博徒の親分に就て今一つ意外に感じたことを語らう。信州上田の博徒の親分早川當五郎と獄中に會して、私が素讀の師となつたことは「獄窓舊夢談」に記した通りだが、二十餘年も經過した或る年、大隈老侯の邸に信州の多くの有志が會した時、私は老侯に用談があつて其席に行くと、聞らずも此の人に出會した。此人は顔面に紫斑があつて、紛れ難い特徴があるので、直

ちにそれと分つて、意外の感があつたが、其席にゐた降旗元太郎氏に聞けば、自分の選挙區内の大切な道具であるといふので、其席にゐた意味を解した。其後大隈侯が吾が郷里越後に下らる、時、是非侯の護衛の爲め同伴を許されたいと懇請して侯の一行に加はり、新潟にまで来て、夜間は侯の寢所の隣室にフロック姿で、端坐夜番をしたことがある。これなども自分の經歷中に意外の二に數ふべきである。

八 龍動の真中で切腹の準備 前將軍に草履を取らす

明治十五年に外資借入の廟議があつた時、英國へ派遣された人は吉原重俊しげとしであつた。サンドといふ英人が非常に斡旋した結果、某銀行が貸付を諾するまでに交渉が纏まつたので、サンドは吉原を伴うて銀行へ往かんとすると、吉原は意外な問を發した。それは龍動ロンドンの何處かに日本疊が一枚あるまいかといふので、サンドは無いといふと、然らば布の敷物はあるかといふので、それはあるとの答を得た。吉原は更らに榭せきといふ樹があるであらうかと問ふので、サンドは奇問の續發に不審を抱き、今大切な場合そんなものを搜して何にするのだと問ふと、吉原は爰に

初めて本音を吐き、折角容易ならぬお骨折で今日事が成るまでに運んだ所へ、本國政府より見合すべしとの電報が來たので如何にも面目が無い。私も武士の流を汲むものであるから、自刃の意を決してゐる。先刻有無をお尋ねしたものは皆割腹の際必要のもので、それを銀行へ持込み、違約の罪を謝した上で、直ちに自刃を遂げんとする積りと、固く意を決してゐる様子であるので、サンドも~~モ~~外の事に驚き、這般の行違ひは國際間には間々ある事、コレ式の事で身を果すなどは君の爲めに取らぬ。全體郷に入つては郷に従はねばならぬもの、英國では國法で自殺を禁じてゐる。君は英國に在る限り其法律に背くことは出来ぬと、理を盡して諫めたので、吉原も己むなく決意を翻したといふが、日本武士には珍らしからぬことながら、明治十五年にもなつて外國に使したものに斯る武士魂が現はれたのは意外とも云ひ得よう。外人から見ても尙更ら意外の事であつたらう。併しこんな事が日本人の信義をあらはして財界でも評判がよいと、久しく英佛に財務官たりし森賢吾氏から聞くがま、こゝに收める。

私の友人で徳川慶喜公に草履を取らせた者がある。勿論慶喜公が將軍を辭されてから後の事であるが、明治五六年頃か、上野の不忍池に競馬のあつた頃、慶喜公も觀覽席に居られたが、

其の棧敷の一段上の席に、當時まだ三四歳の小兒であつた、私の友人は親に伴はれて觀覽してゐた。その際誤つて穿いてゐた草履の一半を、下なる公の席へ落した所、公はみづからその草履を取つて、この小兒にはかせてやられた。この小兒といふは、早稻田大學の教授松平康國氏である。

九 似顔付サイン 大根の極印

畫家下村觀山氏が前年外國に遊んだ時、銀行で金を請取るに、日本で印を押す場合に流石は畫家だけ工夫があつて、印の代りに自分の似顔を描き、その下に署名した。勿論倉卒の筆で鳥羽繪の様な者ではあるが、よく肖て居るから、此の花押が到る處通りがよかつたといふ。實はこれ程確かな花押は無い。己れの肖像を畫くのであるから、其人の面貌がわかるのみでなく、其筆者が畫家であることも同時にわかる道理である。これなどは意外な花押と云ひ得るであらう。

私には聊か印癖がある所から、方々より印や印譜を贈る人がいくらかもある、ある時尾州出身

の赤堀又次郎氏が、風呂敷に何か大きなものを包んで携へ來り、君は印がお好きだから之れを差上げるといふ。偉い大きな印であるナと思つて開けて見ると、意外にも大根が現はれ出た。よく見ると、此の大根に黒肉で印が捺してあつた。赤堀氏の云ふには、宮重大根は舊藩みやまじの時から將軍家に献上になるので、いろ／＼やかましい規定があつて、今でも此大根には必ず極印を捺することになつて居る、即ちこゝに捺してあるのがそれだと聞いて一笑した。

一〇 潔癖と勘違ひ

越前の春嶽公は非常な潔癖家であつた。厠は不淨の場所だと云ふので、寒中と雖も赤裸となつて入るを例とせられた。潔癖も爰に至つては極端で、一寸眞實と受取れぬ程の話であるが、永く公の小姓を勤めた佐藤誠氏と云ふ人の直話である。又維新の當時司法卿であつた、大木喬任卿は豪放な性質で、何うかすると倨傲の譏りも受けた程で、霸氣満々たる人物であつた。斯様な性質からか、但しは潔癖の爲めか、此人には他に見るべからざる奇行があつた。紅葉館の女中の語る所に依ると、卿が酔つて便所へ行くと、必ず手を拍つて女中を呼び、之れに命じ

て陽物に水をかけさせて拭かせたと云ふ事で「何うも之れには困りました」と女中は語つた。

同じやうな意外話が今一つある。獨逸から某醫學博士が來遊の折、我醫界の大家が花屋敷の常盤屋へ迎へて饗應をした。其際此外國人が便所へゆき、事果て、出でんとすると、老婢が柄杓に水を汲んで佇立してゐた。外人には廁に上つて手を洗ふ慣習が無いから、何故水を把つて待つてゐるかい分らず、思案の末、必定陽器を洗ふのであらうと、ボタンを外して老婢の前に露はすと、意外の事に老婢は笑ひ崩れたので、外人は怫然として怒り、席に戻つて其の無禮を詰るので、主人側も驚き、種々穿鑿の末、行違ひが分つたので、漸やく外人をなだめた。此事も常盤屋の婢の直話である。

一一 蝮蛇の液 物騒な媚薬

蝮蛇なめくぢといふ、ぬら／＼した蟲は、濕地に多く見るものであるが、これが意外の液の持主である。尤もよく知れてゐる事實は、瘴猛なる蛇が此の蟲に出遇ふと恐れ入つて、必らずすくんで仕舞ふ。其の恐るゝも道理である、此蟲が蛇の體に一旦取りつくと、どうあつても離れず、粘

液を體內から出して、ぐにやく、蛇の體の上を匍匐しつゝあるく。或は時に此液を垂らしながら、若干の距離を飛んで他の部面を冒すこともある。さうすると、此の液で濕うた蛇の體は看る看る融解して、終には全く骨のみを残すに至る。これは多くの人が目撃してゐる事實で、いろいろの本にも書かれてゐる。全體此の液には如何なる化學的成分があるのか、私は平生之れを意外に思つてゐる。尙ほ意外とするのは、此液は單に蛇身を融解する作用があるのみでなく、種々の作用がある。工藝家が象牙に加工する場合に、これを和けて餅の如くする必要のある時は、蠟蜒を煎じて、牙をそれに濡せば、牙は自在になると云はれてゐる。又陶器に孔あなを明ける場合なども、錐の尖頭へ此の液を塗れば、苦もなく孔が穿てると云つてゐる。工藝家には誠に大切な材料で、昔は之れを祕傳とした。亨保九年入江貞庵の著した「百工祕術」の内に左の記事がある。皆な蠟蜒の液の意外の作用を爲すことを示してゐる。

器工門、角や象牙を軟かにする祕法。今こゝに祕中の祕を見あはす、まづ角を絞にておろすなりとも鐵鍛にてなりともたゞきくだきて鍋に入れ、水見合に入、蠟蜒を數十條入れてよくよく煮るべし。もしとけざる内に水干ば、別に湯を沸し置き、これをさすべし、如此す

れば、後、糊のごとく解るもの也、もし少しかため餅のごとくして細工せんとおもはゞ、しばし置くべし、堅くなるなり、いかやうの細工にても出来るものなり、急にかためんとおもはゞ、甘草水にてよし。

盆山庭石等割たるを繼ぐ法。盆山庭石等のわれたるをつぐ事、漆にうどんの粉まぜつけば、つがる、物なれども、繼目みゆるものにて見ぐるし、蠅蜒の涎りにてつぐべし、水に入てもはなれず、つぎめ見へずしてよし。

茶碗などをつぐにも、蠅蜒にしくはなし。

磁器類の穴を穿、または心のまゝ石切り製する術。磁器の類、穴を穿るに、世につたへ云ふは、艾葉にて灸三五すへて後、きりにてあくるとあり、これにて穴あくものにあらず、極傳授あり、夏月極暑の時、杉の木にて錐をこしらへ、此錐に蠅蜒をさし通し、炎日に干べし、かはきつくもの也、此きりにて穴をあくべし、心やすく穴あく也、また鋸小刀の類もこしらへ、これに蠅蜒を干付べし、何様の磁器にても切れるなり、疑しき事にあらず。さて蠅蜒を作る法として、下巻雑工の部に特に一節を載せて、左の如く云うてゐる。

一、蠟燭を作るには、芦を繩にて一抱しめて、盤たもとに水を入れて、それ／＼芦の切口をそろへ、水にひたし、一夜置くべし、明日芦を見れば、蠟燭あるもの也。

これも亦不思議の感がある。本草などを調べたら、相當の解もあらんが、今は唯だ事實を録するのみである。

支那ほど性慾を助ける媚藥の多く工夫されてゐる處はない。随分迷信から起つてゐるものもあるから、案外に思ふものが少なくない。「三國志」で名の高い蜀の所在地四川省には、縮陰病が流行するといふが、之れに就て工夫された藥は、滋強の草根木皮を取り合はしてあることは勿論だが、これに一祕劑が調合されてゐる。それは何かといふと、縮火藥の如き爆發性を有してゐるものだと言ふ。之れを用ゐる譯は、爆發力を以つて陽器を鼓舞する趣向であらうが、支那人ほど意外な工夫をするものは無い。

一一 力士を向うに廻して 森林意匠の一室

意外の人に意外の腕力が具つて居る。中上川彦次郎氏は福澤翁の姪で、實業家として知られ

だが、此人の腕力は非常のもので、曾て常陸山と腕押を遣つたことがある。無論捷利は常陸山に歸したが、兎も角對抗する丈の力があつた。又大阪の大儒中井竹山も異常の腕力家で、谷風と京都の或る酒席で會した時、一つ「枕挽戲まくらひぎ」を行つて見ようと竹山から言ひ出した。谷風は内心嘲りながら言ふが儘にやつて見ると、此學者なかく強い。たうとう双方勝負が付かず、枕の方が破れて了つた。夫でも竹山の手は枕から離れなかつたと言ふ。

淡島椿岳と云ふ人物は、一種の拗戾者すねもので、極めて奇行の多い人であつた。然し中々面白い畫を書き、どこか超脱した處のある、仙人じみた性格の人であつた。此人の家に意外な構造の室があつた。それは窓一つなく、白晝でも眞暗な室であるが、よく見ると、四壁に椿岳の筆で大木の杉が凄じ様に一杯に描かれ、室の一隅に圓形の穴が穿つてあつて、其處から差入る薄暗い光線で四壁の杉の圖が見える様になつて居る。此室に入ると、恰も森林の中に這入つて月影の僅かに洩る、を望むの感があり、そゞろに人をして凄愴の感に堪へざらしむる。此點が即ち椿岳の意匠の存する所で、生前には、こゝで坐禪をやつたと云ふことだ。

一三 攝津大椽の喉 美男の吉良上野介 三人の林權助

大阪の故人攝津大椽^{だいじょう}は、聲の美を以て淨瑠璃界に鳴つたが、義太夫には餘り聲が好過ぎる所から、滋味をつけるに餘程苦心した。併しどうしても滋味が付き兼ねた。已むなく聲の長う續く特長を利用して、一種他人の擬し得ざる節を工夫し、終に大名を博した。攝津の晩年に或る醫學博士が、此人の聲に不審を抱き、攝津に請うて喉の検査を試みたことがある。然るに果して喉部に備はる嚙は女子のと同じであることを發見したといふ。此事は八九年前浪花に於て攝津門下の人より自分の親しく聞いた話である。

吉良上野介と云ふ人は、赤穂義士の評判が無暗とよい爲めに、繪などには瘴惡な醜男子に畫かれてゐるが、此人實際は非常な美男子で、若い時分には田舎源氏にある光氏も宜しくと云ふ位な美貌の人であつたと云ふことが近頃分つた。曾て吉良家の菩提寺たる三州片岡山花藏寺に傳つてゐる上野介義央^{よしか}の木像の寫眞を見たことがあるが、事實其通りである。

歴史上には往々意外のことのある者で、昔慶長頃に鳥居光忠の家來で、關ヶ原の戰爭に伏見

の城を枕にして自殺した忠臣に林權助と云ふ人がある、其時同じく忠死した其子は又三郎と云うたが、明治戊辰の役に、矢張り伏見の戦争に林權助と云ふ人があつて、其子も亦、又三郎と云うたが、父子共に戦死を遂げた。明治と慶長とは三百年も隔つて居るが、同じ名の父子が同じ土地に戦つて、同じ運命に墜れたと云ふのは實に奇縁である。然るに此前後の林權助は矢張り同じ血統の者で有ると云ふから愈々妙だ。吾が外交界にも知る林權助と云ふ人も、調べて見るに、矢張り慶長の林權助の後裔であると云ふも奇だ。

一四 一切經を讀んじ又手寫す

佛教隆盛時代に精力絶倫の僧が輩出したことは珍らしくもない事だが、中には意外な僧がゐた。建仁寺の榮西禪師えいさいの法弟で、釋良祐といふは、安覺と號し、亦色定ともいうた。此人宋に入つて、十年の間に、一切經全部を誦誦して歸つたと云はれてゐる。此事は「鶴林玉露」の著者羅景綸が、目撃のまゝ、を其書に書いて居る。あれほど大部の經を誦誦したといふは古今に類がない。然るに意外は之れに止まらぬ。此僧は歸朝後、一切經全部の手寫を企てたが、これも

成功した。即ち文治元年二月十九日から筆を着け始めて、承元三年二月十六日に業を卒へ、六千巻の手寫が成つた。此時五十一歳で、實に三十年の歳月を費したのである。此の筆寫は、寺に在る時のみの仕事でなく、行脚あんぎゃく游歴の時も必ず筆紙を携帶し、旅舎に於ては勿論、野宿の時でも船中でも、苟くも暇さへあれば書きつゞけて、終に其の業を卒へたとあるが、此經の幾許かが今猶筑前の宗像むねがた神祠に存してゐる。それを見ると、筆寫の年月日と地名とが記されてゐると、北條霞亭の隨筆に見えてゐる。

一五 十里の間に三百餘の關所 社寺の商賣

昔し交通が開けなかつた時、旅客が如何に不便を感じたか、幾んど想像に餘る位であるが、當時交通の不便といふは、道路が無いとか、不完全であるとか、船車の乗物がないなどいふばかりでなく、嚴しい關所が要衝に多く設けられて、それが少からず旅客を悩ました。此の關所は、徳川時代に於ては警備の爲めにしたのだが、中世には、通行税を徴する目的で大名や豪族や寺社などが設けた關所は意外に多かつたのに一驚を喫する。今泉澄氏の著書に據ると、淀川

十里の間だけに三百幾十个所の關所があつたといふ。僅か十里の間に三百幾十个所停船を要する所があり、それ／＼に若干の通行税を拂はねばならなかつたことを思ふと、當時旅行の不便は全く想像外である。勿論これは一例で、各地共に大同小異の事があつたと思はねばならぬ。

昔し寺院や神社が其の收入を圖るために軌道を逸した行爲のあつたことは隠れもないが、併し事實に徴すると、行き過ぎ方が餘りに甚しいので、意外の感を起さしめる。今泉澄氏の著述に據ると、京都の祇園社では綿、宮崎神社では油、攝津の今宮では魚といふやうに、座を設けて特權が與へられてゐたといふ。これなどは多分商人が便宜上神社を中心として其の保護の下に商業を營んだものとも見られ、神社直接の營業でないやうだが、寺院が自から商業を營んだ例が少からずある。天野の酒、道明寺の糰はしこ、大福寺の納豆、昆陽寺の蒟蒻、新善光寺の扇などは特に著名であつた。中に就て耳立つのは酒の製造であるが、昔し近江の百濟寺くたせじ、河内天野の金剛寺の酒が拔群の譽高く、秀吉も之れを愛用して、吟味精製すべきやう一山に命じたことさへある。鞆酒山門に入るを禁じてゐる寺で酒を製造するといふは意外である。延暦寺が質屋業を京都に營んだことや、高野山の僧が行商をしたことなども隠れもないことで、藥などを持ち歩い

たのは僧にふさはしいとも云ひ得ようが、吳服類までも行商したのは行き過ぎで、京都邊では此の高野聖かうやひじの行動を卑めて「マイス」(賣子)と呼んだ。

一六 浮浪者の半面 悪所の希觀本

社會の暗黒面には意外の事のあるのが寧ろ通例である。長く浮浪者の實狀を調査しつゝある、草間八十雄氏から聞いた話の内に、彼等浮浪者の内にもおのづから頭領があり、其の統率の下に立たねば生存が出来ぬ、そして其の頭領に大隈の諱名あだなが付いてゐる、勿論一脚を失つた不具者だから此の諱名があるのであるが、斯る暗黒面に大隈の名を聞くのも意外である。賣春乞食の内には加藤さんといふがある。これは吉原土堤に出没して懐ろの空疎なヒヤカシ客の歸途を誘拐するので、「土堤のおきん」が通り名となつてゐる。其年齒は六十を越える高齡で、密賣七十二犯と聞いては、これも意外の内に數へねばならぬ。彼等が好んで塵溜場を夜間の時に選ぶといふも意外だが、堆積の塵埃は一種の醗酵作用を起して溫熱を生ずると聞けば、こゝを寢心地のよいベッドとするのも一理ないではない。淺草觀音堂境内を賣ひの場所とする浮浪者の内

には、千住邊から通ふものが多く、それが或る所で襤褸の服と着替へるといふのも意外である。彼等の内にはなか／＼富饒のものもあつて、或る頭領株は貳千圓の金を貯蓄してゐると云ふも意外である。落合邊おちあひに巢すくふ乞食連で時に洋食を注文する者があるといふも意外だが、流石に洋食店は其の巢すくに持運ぶことを欲しない所から、或る民家に頼み、そこまで運ばせると聞いて、亦復意外の思をなした。

昔し芳原の繁昌時代に、玉屋と云ふ遊女屋に不似合な貴重書が傳はつてあつた。それは永祿頃の鈔日本紀である。其道の學者達はこれを切りに見たがつたものであるが、何分場所柄だけに見せて貰ふに困難した。故人小杉楓邨博士などの若い頃には是非其の本を見たいと云ふので、學者同士聯合して玉屋へ登樓し、敵娼を語らつて主人に懇請に及んだ結果、美事見せて貰つたと云ふ話がある。此の貴重な書物は「玉屋本」と言はれてゐるもので、御維新の始め政府が各方面から史書を蒐めた時借出されたきり、遂に戻らずじまひになつたと云ふ。

一七 半峯博士と紙 詩版を薪とす

自分は古今の紙を集めて紙の變遷の研究を企てたことがあつた、先頃ある同人の席で此話が出る、座に高田博士もゐて意外の事を言ひ出した。俺も洋行中剛に行く毎に不淨紙を集めて見た。國々により色々相違があつて、中には西洋の製造に係る紙に、失禮にも「ミカド」の名をつけてゐるものもあつた。元來不淨紙は日本の「さくら紙」が受けがよく、それに「ミカド」の名をつけた所から、不淨紙の名となつたと見えるなどの話が出た。高田博士の如き人が意外な蒐集を試みたもの哉、と事の奇なるに驚きつゝ、一體何の爲めに集めたのかと問うた所、親類に「さくら紙」の製造を業として居る者があるから、その参考の爲めと聞いて一笑した。

明末支那の常熟縣に毛晋字は子晋といふ人があつた。此人は十七史其他經書子類を多く精刻して名が高い。「汲古閣本」といふのが即ち此人の刻本である。此人の刻したもので書名のみ傳はつて版の亡びたものもあるが、意外の原因で焼かれたものが一つある。それは「四唐人集」といふ詩集であるが、偶々「存亡考」を讀んで見ると、左のやうに録されてゐる。

板已作_レ薪煮_レ茶、相傳、毛子晋有_二孫、性嗜_三茗飲、購_三得洞庭山碧羅春茶、虞山玉巖泉水、思_レ無_二佳新_一、因顧_二四唐人集版_一而歎曰、以此作_レ薪煮_レ茶、其味當_二倍佳_一也、遂按_レ日勞_レ燒_レ之、

これに依つて見ると、毛氏の孫が煎茶を好み、佳水と佳茶を得たが、さて佳薪の無いのに困しみ、父祖折角苦心のものではあるが、合格すべき佳薪は「四唐人集」の版木の外はないと、遂に劈いて焼いたとある。版の亡びる原因は種々あるが、これは又意外の原因である。

一八 插槌—燐寸—靴 金城の鴟尾—日光の建築

昔し江戸時代に、毎朝味噌を插鉢すく鉢ですりこなす爲め、插粉木すくこぎの減つてゆく量を積算し、それを江戸中の人家の数に乗ずると、一日でも非常な大木を消費する計算となる、即ち江戸の人は總掛りで毎朝大木を味噌に和して喰つてゐるに齊しいと云うたが、個々に就ては少量でも積算すれば意外の大数となるものである。前年外國の新聞に、或る人が人間一代に使用する燐寸ほらの數量を計算したことがある。即ち烟草に火を點ずるためや其他種々の事で一日使用する燐寸の數を凡そ三十本とすると、一生五十年間に使用する燐寸を、一本の材木に見積れば三千三百五十立方寸に當る。此材木の長さは人間の身の丈の三倍以上もあつて、到底一人で運搬の出來ない程の重量である。又人間一生に穿く靴の原料を積算したのを見るに、一年に凡そ靴二足つ、

を穿くものとし、一足の靴を作るに牛皮二・五平方尺を要する、而るに一疋の牛からは僅かに三足分の皮さへ取れぬから、五十年間の靴を作るには三十三頭の牛を要するとあるが、意外の大數に上るものである。

名古屋城の金の鯨は、寶物を見ても可なり大きなものであるが、さて其の實價を積つて見ると案外大なるものである。此の鯨の鑄造に使用された黄金の價が當時小判千九百四十枚と傳へられて居る。之を慶長小判に換算して見ると、一萬七千九百七十五兩になり、假りに二十圓二十八錢の相場で積つて見ても、三百六十五萬三千三百三十圓に當るから意外の金高である。又日光に於ける徳川氏の廟は華麗の結晶とも云ふべきだが、近年建築學者の取調べた數字に據ると、陽明門などは一坪二十萬圓もかゝつてゐるといふ。しかし規模は割合に小さく、全部の建築を合せても東京驛の建築よりも小さいとは、是れもまた案外である。

一九 地獄は僧徒で満員

私が長崎へ往つた時、何よりも先きに訪ねて見たのは黄檗わうまきの諸寺であつた。この寺々は飽く

まで支那風に建築され、毫も倭臭を存せざる所に少からず趣致を覺えた。昔し隱元いんげん、木庵きあん、即すなわち非ひなどの高僧が住した關係から、此寺々にこそ隱木即の眞蹟が多く存してある筈と、寺僧に閱覽を求めると、寺僧は落ちつき拂つて、意外な返答を與へた。曰く「在家へ托鉢に出たきり遠つてきません」と。これは質屋に典して戻らぬことをいふのであるが、案外の斷り方に私も一笑了。又紫野の大徳寺に近年まで超脱の高僧がゐた。ある時面會していろ／＼話すと、老僧曰く、さて／＼君と話すことの面白さ、君は俗人ながら、僧と語るよりも俗を離れて興があると、暗に今の僧の墮落を言外に漏らし、さて語を次いで語るを聞くと、此頃田舎の人が來て、拙僧に質すには、私等は死後はどうせ地獄へ行くのであらうが、何とかして行かぬ工夫はあるまいかと、問ひましたから、拙僧の申すには、其心配は無用である、今の所、地獄は僧を以つて満員を告げ、あなた方を容るゝの餘地はないと答へたと聞き、此僧の意外の諷刺に一笑を禁じ得無かつた。

二〇 趣味は異なもの

前島男爵は古董の門人で、尺八では素人離れをして造詣が深かつた。私などは度々聞かされたから意外とも思はないが、此事を知らない人は意外とするかも知れん。書道で名の高かつた長三洲も亦た古董の門人で、これも男爵に拮抗するほどの名人であつた。漢詩で名聲のあつた永坂石埭氏は支那料理の通人で、割烹を自からした。それが支那料理店のより優つてゐたと云はゞ、或は意外に感ずる人もあらうが事實である。三宅雪嶺氏が洋畫の鑑賞家である位は人も知つてゐるであらうが、夫子みづからが畫筆を把り、天稟に畫を能くすると云はゞ或は意外に思ふものもあらう。服部一三氏は嚴格な相貌態度の人だが、浮世繪蒐集の趣味があり、鑑識もあり、收藏も富んでゐると云はゞこれも意外とする人があらう。岩崎久彌男はミリオネアだから自から漁獵などをすまいと思ふ人もあらうが、投網とうわみにかけては黒人も及ばぬと云はゞ意外とするであらう。東本願寺の前法主光演師は句佛といふ號もあるから、俳諧を能くすることはよく知れてゐるが、畫は栖鳳の門人で、其堂に入つてゐると云はゞ意外とするものもあらう。尙ほ故山尾子爵が金魚の趣味家であり、一たび東京市長に擧げられた奥田義人氏が蟬の研究家であり、辯護士の城數馬氏が高山植物の研究家であるなどは、意外に思ふ人もあるかも知れ

ぬ。

假名垣魯文は明治初頭の戯作者で、自から猫々道人と名乗つた、俗受け専門の人であつたら、高雅な趣味があらうとは思はなかつたが、其書齋を見た人の話しを聞いて意外に感じた。此人の書齋には古い佛像が置かれ、襖は古寫經で貼りつめられ、宛がら僧院であるかの如く、禪味が一室に醸つてゐたといふ。尙ほそれのみでなく、庭下駄にまで一種の工夫があつて、蓮の葉で作つた草履が置かれてあつた。魯文のいふには、既に室内に佛像を置き寫經を襖に貼りつめてゐるからには、どこまでも佛の心を以つて心とせねばならぬ。此庭前には眼に入らぬ細蟲がどれほど居るやらも知れぬ、普通の履物では、それを知らずに殺すの虞れがある、蓮の葉で、ブク／＼した草履を作つたのは、それを殺さぬ用意だと聞いたが、魯文にも意外な非俗の趣味があつたと見える。

二二 缺けた處から召上げれ テンジン違ひ 風呂船

昔し或る諸侯が狩獵のため郊外に出で、茶を請はんと貧家に立寄つた時、農婦が缺けた古碗

に茶を注いで出し、「どうか缺けた處から召上がれ」と云うた話がある。案外な事の様であるが、缺けた處は誰れも口をつけぬから、貴人に對し斯様に云うたのは、無禮に似て却つて禮に合つて居る、案外な處に理のあるものだ。

松浦武四郎が多く珍品を藏したことは當時世間に評判もあつた。或る時天神講を機とし、珍藏の菅公の名幅を見せると云ふ案内を知人に發したので、何れも禮装して出かけて見ると、一室に壇を飾り、種々の供物をならべ、上に一幅懸けてあるが、これは白絹を以つて蔽はれて居る。愈々開帳となつて白絹を切つて落すと、現はれ出たのは浪花の私窩子の繪番付であつた。一同意外に驚き、一杯喰はされたと笑つたと云ふが、浪花では私窩子を天神と云うてゐる。

徳川時代の悠長な天地には、それ相應悠長の事のあつたのも不思議はない。淀川を上下する船の便利を圖るために、深夜酒食を載せた舟が、「喰わんか〜」と高唱して、物を賣つた位のことは敢て意外とするにも足らぬが、瀬戸内海には風呂船と云ふがあつて、幾日も浴せず船中に在る人の爲めに風呂に入らしむるを業とした。これは當時の氣分になつて見てもチト意外である。

二二 俳優入浴的一幕 螢と蚊

文化頃の芝居の繪本を見るに、極めて稀れではあるが舞臺の上に役者が風呂に入つてゐる圖が出て居る。場面を變化するの意匠としては如何にも奇抜である。尤も當時淫靡、風をなして居つた、満都の子女の目前に俳優が素肌を現はして見せると云ふに就ては、別に何かを挑發する意味も伴つてゐたに相違ない。何れにしても舞臺の上に風呂桶まで持込んで幾多の俳優が裸體であらはる、などは意外の工夫と云はざるを得ぬ。

「啼かぬ螢が身を焦す」といふは戀を唄ふ絶唱だが、併し譬喩的に云うた迄で、螢の光に生殖の關係があらうとは思はなかつたに、理學者の研究に依ると、意外にも螢が光を放つ時は其交接期で、戀に無交渉でないことが知れた。又三伏の炎暑に人を襲ひ來つて、生血を啜る蚊に就て、學者の研究に據ると、これは丁度蚊の懷妊期で、人の血を吸収し、それで胎兒を養ふので、人に近づく蚊は皆な女性であると聞いたが、こんなことも動物學の門外漢には意外の感がある。

二三 狩野永探 來聘使喫驚す

久しく日本に來てゐて大學教授となり、古美術の研究をして日本のために少なからぬ貢獻をした、フキネロサ氏は誰も知つて居る人であるが、「狩野永探」といふと餘り人は知らぬ。が此の永探こそ、フキネロサ氏の雅名である。氏は狩野家の畫を研究したことがあるので、狩野永惠より斯の名を受けたのである。即ち永の字は永惠より、探の字は探幽より取つたので、鑑定書には狩野永探と署してゐる。

探幽や巨勢（金岡）が日本畫界の傑物であることは爰に斷る迄もない。況んや此の名を見て意外に感ずる者などは日本人にある筈はないが、さて朝鮮人は昔し此の名を見て驚いたのだ。曾て朝鮮の聘使が日本へ來り、新井白石と應接した時に、彼等は此二人の畫家の名に就て意外の思をなし、意外の間を發した。それは日本では何故這般の淫猥な名をつけるのかと云ふのであつた。彼の地では「幽」と云ふ字は女陰を意味し、「巨勢」は陽物を意味する所から、聘使が愕然としたのも故ある哉だ。又太宰純は「春臺」を號としてゐるが、これは本場の支那では

聳驚する字面だ。彼れ太宰が「修刪阿彌陀經」の著者であるだけに一寸妙だ。露國の帝政時代の頃の事だが、エビス・ビールを同國へ持込み、大に當てようとした處、「エビス」の名が不都合だとあつて一向相手にされ無かつた話がある。「エビス」は日本でこそ福神だが、あちらではやはり前述の幽的意義の語であつたからなのだ。

二四 八重野夫人 外人の出鱈目 難訓一斑

故宮内式部長きんのみや三宮義胤男の夫人はロンドン生れであつた。ある時其夫人の名を聞いて、意外に感じたのは、八重野といふ、如何にもやさしい名である事であつた。良人が宮中に仕へる身であるから、外人ながらも斯かる名に改めたものと見える。

西洋人の出鱈目には毎度閉口する。日清戦争の頃、米國に發行する雑誌「エラストレーツド・アメリカン」に伊藤公夫人の肖像として載つてあつた者が實に意外であつた。よく錦繪に、鴨河の流れに涼臺を架し、美人が片脚を流れに投じて居る圖がある。これは誰れの目にも熱してゐるものなのに、其美人が即ち公爵夫人であるとしてあるなどは噴飯せしめる。畢竟日清戦

争の舞臺には、伊藤公が大立物である所から、こんな思ひつきを遣つたものであらう。

日本の地名人名などの読み方に意外に面倒な者がある。例へば東海林と書いて「シャウジ」と読み、薬袋と書いて「ミナイ」と読み、設樂と書いて「シダラ」と読み、利母と書いて「カバラ」と読ませるなど、列擧に遑なしである。それから地名では、道祖土と書いて「サイド」と読ませるも奇だが、出雲國出雲郡出雲郷と書いて之を「イズモノクニ、シユツトゴホリ、アタカワガウ」と讀むなどは案外である。又享保二十年の昔、時の將軍から諸藩の士分に奇異の姓や名を有する者を書き上げさせたことがあるが、その記録を見ると意外な名が多く載つて居る。今一二を挙げれば、松平備中守の内には「平平平平」と「谷谷谷谷」といふ兩人があり、松平修理大夫の内には「小助助助」と云ふがあり、松平豊後守の家の中には「七分五分形紋左衛門」、小笠原左近將監家中には「松飾目出度左衛門」、田中左京大夫家中には「二三三四五六」と「正月十三日」、松平佐渡守家中には「松平梅干之助」などの名が見えて居る。

二五 色狂女性と奇怪な按摩

尾崎行雄氏が曾つて法相たりし時、各所の裁判所を一巡した。其巡回中、法相が意外に感じたことが二つある。監獄に色情狂で良人を殺した婦人が入監してゐた。其の婦人は良人を殺したことは白状したが、其死屍を検するに陽器が紛失して居る。それをいろいろ婦人に訊問しても、流石に之れに就ては何も語らなかつた。已むなく婦人の糞を試験することゝなつたが、糞中に其物の織緯を發見したので、紛失の原因が婦人であることが分つた。今一つ意外なことは、法相それ自身に關係のあることであつた。或る夜旅舎で按摩を招き、揉ませながら睡つた所、按摩が妙な所業を爲すのに驚き、目を醒まして見ると、按摩は法相の或る物を熱心に舐めて居るので、法相は吐りつけて按摩を退け、其の譯を訊さず已んだと云ふが、此の按摩は男子であつたと云ふから、或は何かの迷信で斯る所業をなしたものか、さなくば變態性慾狂でもあつたらうか。

二六 柿本人麿 髻自慢 生髻賣買

關西では柿本人麿を祀つて、抵ね火除ひよけの神、安産の神として居る。夫は如何なる故かと尋ね

て見ると意外の答を得た。人麿はヒ・トマル、即ち「火止」といふ普通より火除の神とし、又ヒトマル即ち「人生」の普通より安産の神とするのであると聞いて一笑した。

赤松滄洲は美髯を以て海内無双と自負して居つた。ある日一人の老人が訪ねて來た。應接して見るに其の人の髯が如何にも立派で、長さ尺餘もある。流石に滄洲も自ら愧ぢ、中心不快を感じた。其の客漸く去り、立關まで送り出すと、此の老人願に手を掛けると見るや、髯を取り外し、丸めて懷に押し込み、ふり向きもせず悠然として去つた。滄洲は初めて其の假髯かりげなりしを覺り、一杯喰はされたと切齒した。此老人何人なるか分明ならざれど、豪傑氣取の人に接する秘訣を心得て居る者と見える。

廣瀬旭莊の「九桂草堂隨筆」に髯の話が載つて居る。或る諸侯の城下に美髯の人があつた。城主が能面を作らせんとして、面に植ゑる髯を要する所から、此の美髯の人より其髯を三十金で買入の約束が成立した。美髯の人は剃刀で一擧剃り落して、面師に渡さんとしたが、面師は異議を申立て、剃つた髯は死髯である、活髯で無ければ面の用に立ち兼ねると言うて、一本又一本、其の持主が苦痛に感ずるを氣にもかけず盡く抜き去つたといふ。

二七 日光の宮號運動 明皇貴妃

物の裏面を穿鑿すると意外のことがあつて、それが爲めに其物の金箔の剝けることが珍らしくない。東照宮といへば誰れしも尊崇してゐる様なもの、日光に徳川氏の廟を建てる時、天海などが朝廷に猛烈な運動を試みた結果、ヤット宮號を得たのだと云うたら、意外に思ふ人もあらうが、それが事實である。初め朝廷では、東照權現の神號を賜はつたのであるが、幕府方では是非宮號を賜はりたいと懇願した。朝廷では一旦拒まれたけれども、幕府方で菅原道真の先例を申立て、人臣でも宮號を賜はつたことがあると頼りに請うた爲め、漸やく勅許になつたので、初めから家康の功德を思し召されて賜はつたのではない。斯様に裏面の真相が分つて見ると、家康の難有味もいくらか減る様な氣がする。

「長恨歌」に歌はれた立宗と貴妃は膠漆管ならぬ戀中で、性慾家の羨む所であるが、あの女も二度までも御機嫌を損して逐はれたことのあるのを人は意外とするかも知れぬ。しかし意外はそれだけでなく、繪に書いてある二人を見ると、貴妃は勿論、立宗も可なり風氣のある様な男振

りとなつて居るが、馬鬼の難の時には七十の老齡であつたのだ、それが女狂ひをしてゐるのが、いくら支那でも意外である。

二八 通説當てにならず

平凡な人間が、誤り傳へられて大層えらさうに持てはやされ、教科書などに麗々と掲げられてゐる者がいくらかもある。彼の鹽原多助、佐倉宗吾の如きが其一例である。多助は勤勉力行の權化の如く、宗吾は佐倉の義民として、普く世人の追慕を受けて居るが、何ぞ知らん、近年調査の結果は兩人共素行修らざる人物であることを發見するに至つた。日外坪内逍遙翁が教科書編纂の折、語られた所に據ると、多助は卑しむべき人物で、到底歴史に載すべき人物でない。彼は炭屋を業として産を成したが、一度成功するや其行狀は前日に反し、主家より貰うた妻を虐待し、其妻の歿するや當時の人目を驚かす程の盛葬を營んで、其非を蔽はんとした。そして追々奢侈を極めた爲めに幕府よりお咎を蒙つた位な男であると。又佐倉宗吾も、實地に就て調査して見ると甚だ世間の傳説と相違して居る。嘗て故人團十郎が宗吾の芝居を演じようとする

に當り、例の考證癖で實地を取調べた結果、宗吾は品行の修らざる小人で、彼の直訴事件の如きも賭博的客氣に逸りて遣つた仕事で、決して義舉などと云ふべきものでない事を發見して、大に失望したといふ。

晩年聖人の如く仰がる、人でも、青年時代には多くは相應の瑕瑾のある者で、斯様な事は深く咎むるにも及ばぬ。本居宣長、貝原益軒の如き人物は、誰れが見ても無疵の人の様に思はるゝが、若い時には矢張り若い相應の事があつた。宣長は其畫像を見ても昔が偲ばるゝ程の美男子で、若い時には随分花柳の巷に出入した者だ。江戸に居た時分でも、遊里に通うて親に叱られたことが其自筆の日誌に載つてゐて、今に傳はつて居る。京都に居る時にも、島原の或る遊女に思はれて變身を變して通つた爲め、友人が心配して、一體君のやうな美男子が遊里に行くから面倒が起るのだ。今度は髪を亂し、粗末な衣裳を着け、貧乏らしくして行けと戯談半分に云うた所が、宣長も戯れ半分に、其通りにして遊里に行つた。すると遊女が非常に驚き、貴郎の様な方が、斯る風をして來られるのには何か仔細があるに相違ない。夫を白狀なさいと迫られて、始終を語つた所、遊女は大いに立腹して、其友人へ散々苦情を持込んだといふ意外

の珍談も残つて居る。

貝原益軒も徳行の標本となつて居るが、矢張意外の事がある。廣瀬旭莊の「九桂草堂隨筆」を見ると、益軒は其の細君より年齢が四十も上であつた。細君はなか／＼の嫉妬家で、益軒が獨り外に出るのを承知しなかつた。但し益軒も油斷のならぬ好色家であつて、細君に焼かれる原因もあつた。晩年夫婦で諸國を遊歴し、有益な書物を著はしたが、それには細君の力も與つて居ると云はれ、美談となつて居るけれども、實は嫉妬の爲め細君が同行したのだ。又同隨筆に、此細君は嘗つて人と私通した事が發覺し、益軒に詫證文を取られた事も見えて居る。

二九 佐賀の亂の陶彈 乞食剩錢を用意す

布團の中では眠られない

九段の遊就館へ行く人は戦争に關する種々の記念物を見るであらうが、爰に佐賀の亂の記念物として砲彈が一つ保存されてある。之が意外なものである。砲彈と云へば誰も銅や鐵を聯想するが、此記念物は陶器である、即ち陶彈である。當時鐵其他の礦物を以て砲彈を造ることは佐賀では困難であつたに相違ない、彈丸盡きての後の窮策として陶彈を作つたのは滑稽な様で

もあるが、佐賀には伊萬里其他陶器を製造する場所が多いから、陶製砲彈を思ひ付いたのは偶然でない。併しこれが實地に用ゐられたかどうかは分らない。

世の中が文明になるにつれ、乞食などもひどくズルクなつて來た。私の意外に感じたのは、熱海に散策中、格別乞食の様な風もして居らぬ小兒が私の傍へ寄つて來て、「旦那大きな銅貨を一つ下さい」と云うた。私は面倒だから、今銀貨の外持合せがないと云うて避けようとする、小兒は「銀貨ならお剩錢をあげます」と云うた。

諺に乞食を三日すると忘れられぬと云うて居る。乞食の境遇には餘人の想像の及ばぬ樂地があるらしい。或慈善家が乞食の子供を憫んで孤兒院に入れてやつた處が、其子が夜分になると必ず布團を脱け出で、ゐなくなる。妙なことだと係員が所在を捜して見ると、片隅に佇んで熟睡してゐる。呼び覺まして何故布團の中に寝て居らぬかと詰ると、其子供と言ふには、どうも布團の中ではよく眠られぬ、安眠を得るには「蹲んで寝るのが一番樂だ」と答へたと云ふ。乞食の習慣から言へば布團などは却つて邪魔になると見える。

三〇 奥平の奇行 慧春禪尼 維新當初の新聞紙

奥平謙輔の事は別項追懷録に收めて置いたが、此人は奇矯の性格を有したから、其の行爲に意外のことが多い。斷獄が決して死刑の宣告があつた後、當該判官に是非一たび面して申し置きたいと云ひ出したので、當該官は、今更何か言ひたいといふのは、あの人にも多少の未練があるのか、と疑を抱きながら、遇つて見ると、意外の事を申し立てた。それは何かといふと、自分が萩の亂に書いた文章や會津征伐の折に秋月胤永に與へた文章は皆不朽の美文であると思つてゐる。願くは私死後貴官により此等の文の湮滅しないやう願ひたいとあつたので、その申立は流石に俗流を超越してゐると判官も感じたといふが、奥平は書と詩文とは得意であつたから、肉體よりも此等を重んじたのであつた。此人の逸事の内に奇矯の事がいろ／＼傳はつてゐるが、萩の一老人から聞いた話に、意外に感じたことが一つある。それは奥平が結婚式を舉げて知己朋友を自宅に會し、披露の宴を開いた時であつた。奥平の平生を知る友人達は、あらかじめ奥平に注意して、結婚は人の大禮であるから、龔略があつてはならぬと、饗應の事に就

ても特に注意をした。愈々招かれて披露の席に就き、膳部を見ると例に依り例のごとくで、一汁一菜の外何の變つたことが無いので、前に注意した友人連もあきれて奥平を詰ると、奥平のいふには、折角君等の注意もあつたから、此の饗應には特に丹誠した。その結果は飯椀を明けて見れば分るといふから、蓋を取つて檢すると如何にも玄い飯が盛つてあつたので、此飯に何の趣向があると問うた時に奥平の答は、平生の飯は人の春いたものだが、これは特に自分自身の手を勞したものだとあつたので、皆々呆然とした。

鎌倉時代には禪宗が盛んであつたから、女流で禪に入つたものは固より少からずある、又中に高邁な行ひをしたものも無いではないが、最も奇抜の行ひをしたものは慧春尼であらう。此尼は或る武家の家に生れ、頗る容色があつたが、何故か人に嫁せず、自から顔を傷けて寺入をした。いくら顔を傷けても天のなせる麗質は蔽ひがたく、或る若い僧に戀想されて五月蠅く思ひ、ある日森嚴なる式のあるに乘じ、突如全裸體となつて式場に現はれ、稠人廣座の眞中に己れに戀する僧の名を高く呼んで恥かしめた。此の尼の意外の行動はこれに止まらず、後にはみづから烈火の内に投じて最後を遂げたとある。

日本の新聞紙の歴史には意外のことが少なくない。その襤褸時代には新聞紙に字引を添へて出したこともある。橋爪貫一といふ幕臣が執筆した「内外新報」に、附録として「字類」といふ小冊子を添へたなどは其一例である。明治六年と云へば可なり時勢も進んだ頃だが、新聞紙はまだ襤褸期を脱し得ず、各社の新聞記者は東京府廳に召喚され、官吏から説諭を受けたことがある。その説諭の次第は、新聞紙の務は目前の出来事を直ちに報道するで無ければならぬ、然るに、カビの生えた古る事ばかり書くのでは新聞紙の體を得ないと、西洋の例を示して懇々説法を受けたなどは滑稽である。爲政者は追々新聞紙を蛇蝎の如く忌み嫌うて、幾回か峻嚴なる法令を發し、筆の自由を檢束したが、當初は大官人が新聞紙を發起もし經營もしたのである。幕末に小栗上野介かづのぼしが西洋で新聞紙の效用に感じ、歸來新聞紙の發行を幕府に建議した。それは採用を得なかつたが、新聞紙の必要は早く官吏から主張せられた。明治四年には時の參議木戸孝允の發意で「新聞雜誌」といふが發刊され、前嶋驛遮頭えきていのかみの發意で今の「報知新聞」の前身「郵便報知新聞」が生れた。新聞紙も當初は官府の獎勵で萌芽を發したのである。可なり後の事であるが、今の元老西園寺公が「自由新聞」に矯激の筆を揮ひ、君側にある實兄徳大寺公

を手古摺らせたこともあつた。左院御用を標榜した「日新真事誌」は外人ブラツクに經營させたが、其の御用新聞に日本の政客が筆を把り、往々政府を攻撃するので政府も困つた。其頃はまた治外法權が撤廢されず、外人はこれに立籠つてゐるから、政府は如何ともすることが出来ず、やつとのことにブラツクを政府の御用掛として去勢した事もあつた。追々新聞紙が進むに従ひ政府は取締を嚴にし、刑律に問はるゝものも出て來たが、當時は士族と平民の差別待遇をなし、士族の記者には繩をかけず、自宅に幽閉する憲法を用ゐる、平民の記者は用捨なく繩をかけて牢屋へ繋ぐといふ不公平もあつた。今から考へると意外な事ばかり。

三一 西郷従道侯 福澤翁 前島男と星亨氏

大隈侯嘗て故西郷従道侯を評して、「アレは貧乏徳利のやうな人ぢや」と云はれた。其故はと聞くと、「西郷は如何なる内閣にも入用であつた。宛かも世帯を持つに貧乏徳利が必要だと同一である。貧乏徳利は、酒入るべし、酢入るべし、油入るべしで、一見無用の物の如くで、實は世帯にはなくて叶はぬ道具だ」と笑はれたが、西郷侯に就ては、世人或は不得要領の人と

解釋し、大西郷の如く、末技などに頓着せぬ人であつたと多く思つてゐる。然るに此人が意外に多能であつて、茶道に通じ、挿花に詳しく、漢學も相當に出來、詩才も可なりあつたと云はば、人は奇異の感をなすであらうが、併し事實全くさうであつた。事情を聞けば無理もない事である、侯は幼少の折家計不如意で御殿へ上り、一年四石の扶持を受け、「龍安」と云ふ名でお茶坊主を勤めた事があるので、茶道などの素養あるのは寧ろ當然である。尙侯が人の如く無暗に其藝を振り舞はさぬ奥床しい性格や、また人に接して愛嬌のあつたことなどは、侯の天性にも依つたであらうが、幼少からの苦勞が之れを然らしめてゐるのだ。

福澤翁はあの位潤達の性質であつたが、案外碁にかけては痴であつた、考へることが長くて相手は皆な困つたと、大隈侯は語られた。翁は人も知るごとく一切風流ジミたことを排し、何でも俗を貴ぶを以て主義とした人であるが、併し何處かに風流氣があつて、往々俗を雅にする頓才を示した。かの世俗と云ふ字を分割して自から「三十一谷人」と號したり、或は「雪池」と號して諡吉に通はせたりしたことなどが其一端である。會つて人に揮毫を頼まれて直ちに筆を執り「油斷大敵」と書いたが、まだ紙の餘白がある。何と書き續けるかと思つて見れば、意外

意外、「彼我忙々」の四字を配した。「彼我忙々」は「火がボウ／＼」に音相通じ、繁劇といふ外に火の用心の寓意もあつて、意外にも下に置けぬ風流才があつた。

星亨氏が會つて前島男爵の門下生であつたと云はゞ、意外に思ふ人もあらうが、それは事實である。星氏は明治の初年前島男に就て英學を學んだのである。氏は剛愎を以つて一生を終始した人であるが、青年の頃も一風變つてゐて、前島男の家族も此人の取扱ひには困つた。男爵在宅の時は教授を受けてサツ／＼と歸るが、不在の所へ來ると、如何にも無愛想で、男爵の家族が何を云うても返辭をせず、寒中などは火鉢の近間へお出でなさいと言つても、空ふく風と聽き流してそれに従はぬ。そこで家人も手古摺つて、あの人は亨（まご）といふ名はありながら、亨らぬ人であるというて、星氏が來る毎に、臺所では亨らぬさんが來たと云うたとは、前島男の眞話である。星氏の母もその頃前島家へ往來したが、これも亦大の變り物で、豪酒で執拗で、頗る面倒な婦人で、亨氏と氣質がよく似てゐたと云はれてゐる。星氏は後に何禮之氏の書生に住み込んだが、これも前島男の紹介に因るので、星氏は前島男に可なり縁故がある譯だが、其の性格の同じからざることや、政治經路が異なる所から、幾んど往復を絶ち、僅かに星氏が衆議

院議長であつた時、前島男が公務の爲め一別以來初めて面會したに過ぎぬとは、是れも亦案外とせざるを得ぬ。

三三二 木戸公の乞食振り 板垣伯の住居

京都の鴨河べりに信樂しんがくといふ旅舎があつて、私は度々こゝに泊つたことがある。此家の女主人は可なり老いてゐたから今は歿したかも知れんが、いろ／＼面白い話を有つてゐた。木戸公と其室お松のことも能く知つて居て、私に面白い逸事を語つた。お松と云ふは、後には崇められて人々偉い者の様に云ふが、實は尋常なみ／＼の女で、某神主の養女である。此神主義氣に富み木戸公をよくかくまひ、幾んど死を冒して守護した。或時は幕府の搜索極めて嚴重で、隠すべき處もなかつたので、己むを得ず數日間床の間の天井に隠し、一枚の板を嵌め外しの出来る様にして、是より飲食物を差入れたことさへあつた。然るに幕府は公が此家以外に居る筈がないと、大勢で家を圍み、十人許りの捕吏が鎗を以て普く天井を衝き、遂には公が隠れ居る處をも一二ヶ所衝いたが、運強くして難を免れた。

しかし段々逮捕の手がきびしくなつて、公は此家に居り難く、辛うじて丹波に逃れて疊職となり、一時を過したが、後には大阪に入り込み、乞食の群に入つて、自ら可笑しい歌を作り、容貌を變じて諸方に滑稽な踊をやつて徘徊したが、人皆其身體の肥満して其氣風の洒落なるを愛し、誰一人之れを公だと覺るものもなかつた。此頃お松は一度公を訪うたことがあつたさうだが、其の居所と云ふは孤作の小屋で、品物と云つては只一つ缺け椀あるのみであつたので、女氣の悲痛一時に迫り、其儘ワツと泣き臥し、暫くは正體もなかつたのを、公はやつとのことで慰めすかして別れた。

公が乞食を假裝して居た頃、京都邊にも徘徊し、例の滑稽踊で藝妓輩を笑はせたこともあつたが、幾許もなく王政維新となり、打つて替つて重く用ゐられて參議になると、お松と正式の結婚を遂げ、夫妻相携へて京都へ來た時には、此の信樂の婆さんも招かれた。其時のお松は實に見紛ふ許り立派の奥様となつたので驚いたと云つて居る。偕て其際數多く招いた藝妓の中に、一人妙齡の舞妓が窈かに婆さんの袖を引き、「アノ旦那様は、いつか見た面白い乞食によく似てお出でた」と云つてクス／＼笑ふのを、公は逸早く耳にして、例の洒落の調子で、「そ

れは其筈、其乞食は乃公だ」と笑つたので、一座は驚いたと婆さんは語つたが、これも意外の談柄とするに足るであらう。

昔改進黨時代に、黨用で板垣伯を訪ねた事がある。當時の伯の住所は芝公園内の第何號地と云ふ様な分り悪い處にあつた。辛うじて番號を尋ね當てたが、扱て其家が如何にも見護らしいので、自由黨總理の家とは思へぬ。そこで念の爲め其家に就て問うて見ると、矢張り伯の家であつた。下駄の三足も並ぶと一杯になる入口に障子が二枚ある、どうしても下等の判任官の住居としか見えぬ。下駄脱くだはきから御免と云うて取次を頼むと、中でお上りと云ふ聲がする。戸を開けると、直ぐそこに伯が客と對談中で、今上れと言はれたのが主人の伯であつたのに一驚を喫した。伯は無難作に應接されて、用は立どころに辨じたが、一方改進黨總理大隈伯の殿様振りと板垣伯の生活振りが餘りに懸隔あるので案外に感じた。

三三 明治の顯官と舊藩主 閑叟公の苦手

長州の毛利元徳公は、言ふ迄もなく故井上侯や伊藤公等の殿様である。此の公長いこと舊弊

の殿様風が抜けなかつた人で、井上が既に大臣格にもなつて居るのを捉まへて、宛がら奴僕のやうに考へてゐた。井上や伊藤を招く場合にも席順がやかましく、伊藤が足輕から起つたといふので、いつも下席に置いた。或時元徳公、伊藤を廳いて、「どうだ、お前も出世して今少し上座に坐る様にならねばなるまい」と勵まされたことがあるが、其頃伊藤は既に相當の官等に進んでゐたのだ。井上に至つては既に大臣にもなつて居たのに、會て宮中の式に毛利公が召された時、着馴れぬ洋服を着けて參内されたのを、井上參議も出迎へて居ると、偶々公の靴の紐が解けた。公は「聞多、之を結んで呉れい」とばかり足を出されたので、井上は大禮服の儘で謹んで之を結んだといふ逸事がある。後に明治天皇が聞こし召され、今頃君臣の別を無闇に正して居る毛利にも困つたものだと言せられたと承はる。

佐智の鍋島閑叟公は英邁の明君であつた。此人抜群の長幹で威風堂々たる所、雄辯四筵を壓する所、大隈侯に能く似て居る。當時内閣で何か議論が起ると、閑叟公は閑叟公の辯舌に驅立てられ、誰れも太刀打が出来なかつたと云ふ。閑叟公は大隈侯よりヨリ以上の籌略もあり、なかなかズルイ處もあつて、此人にスネらるゝと誰れも抑へることが出来なかつたが、唯だ一人意

外人が、いつも閑叟公を抑へた。それは伊達宗城侯（舊宇和島藩主）である。此人固より閑叟公より偉い譯ではないが、一つ祕密を持つてゐた。閑叟公の息女が此人に嫁して居る所から、愈々公が意地を張つて一同困却すると、此人は奥の手を出し「妻をお返しする」と言ひ出す。これには流石の公も閉口して、いつも撃退された。

三四 中將姫支那に喧傳さる 圖書の關所

中將姫は日本古代の貴族の女性で、其人が自ら藕絲の曼陀羅を織つたといふ事や、此の女性が佛の權化であるかの如く、如何にも人間を超越した人であつたといふ話は、日本に於ては隠れも無い事であるが、此事が、いつしか支那に聞えて居るといふのが面白い。嘗に支那に聞えて居る計りで無く、ある倭佛家が之に感服し、姫の事蹟を、恰も我國の繪巻物のやうに描いて、それを立派に刻して居る。日本の高僧の事蹟が支那に傳はり、書籍に書かれて居るのは、強ち珍しい事で無いが、此の女性が高僧以上に取扱はれ、密畫で版に迄刻されて居るのは、案外と云はねばならぬ。日本には中將姫の事蹟を繪に現はしたものなどは少からずある

が、其の日本に在る繪卷や書物が支那に渡つて、それを其儘複刻したのとは全くちがひ、何處から何處まで支那風に描かれてある。蓮の絲を機で織る處もあれば、姫の經歷が備さに畫かれて居る。そして姫其人が、全く支那婦人になつて居る所に興味がある。それには漢文で凡その事蹟も録してあるが、之れが日本の好事家にひどく面白く感ぜられて、二度迄日本で複刻されて居る。一つは寛政年間、今一つは文化年間の複刻で、其の何れかの中の、支那人の題識のあるのを讀んでみると、斯様の佛性婦人が東方に現はれ、しかも支那に於てせずして、海を越えて日本に現はれたことは洵に羨しいと書かれてある。自分は其の二版共持つて居るが、標題は「當麻曼陀羅緣起」とある。

大阪の如き俗地が曾つては書物の淵藪であつたと云ふも意外である。ある時代に、徳川氏の法として、舶載の書物は必ず大阪で検査をする事とした。大阪を経ざれば、支那の書物も、西洋の書物も、絶對に販かきな譯に行かなかつた。大阪は實に書物の關所であつた。無論耶蘇教を取締る上から、大阪で検査することが地形上一番便利であつたからに相違ない。大阪の書物屋には今でも其檢印が残つて居る。それは小さな楕圓形のもので、兎もすると此印の押された唐

本が今でもボツ／＼見當る。當時何人も長崎にさへ行けば支那の珍本は幾らもあると考へたらしく、蜀山人の如きも矢張り然う考へて、役目を帯びて長崎へ行つた時分、頻りに搜し廻つたが一冊も手に入らず、失望したと云ふ話が傳はつて居る。

三五 天一坊の膽玉 奠南一流の命名

天一坊と云へば大岡裁判で有名な不敵の賊であるが、之を刑場に曳いて斬首したものは山田淺右衛門と云ふ人であつた。此人の子孫と山岡鐵舟とは懇意であつたが、鐵舟が此山田の子孫から先代の話だといふのを聞いた話に、天一坊の首は如何にも斬り悪く、首斬りでは大分自信のある自分もたうとう遣り損なつた位だ。さて斬首の後、こんな大膽な奴の膽はどんなであらうと膽を取出して見ると、案外小さいのに驚いたと。

亡友山田奠南は娘にテイと云ふ名を命じた。定めし貞と云ふ字であらうと考へてゐたが、或時其字を訊ねて見ると、意外にも「呈」といふ字であつた。全體どうしてこんな字を選んだのかと問ふと、奠南の答が亦意外であつた。曰く、箆筒、長持を附けて進呈するからサ。

三六 幕末の外交官 五代友厚の書簡

幕府が始めて新見豊前守其他を使節として外國へ派した頃は、日本の禮服は其人の官位に相當する烏帽子直垂、素袍などであつたことは言ふまでもない。使節等は臆面もなく、此裝束を着けて揚々馬車に乗り、群がる見物人が異様の目を睜り、中には嘲笑してゐるものもあるのに氣も付かず、流石に日本は禮義の國だ、吾が堂々たる衣冠を見ては皆な畏敬してゐるとうのぼれたことが隨員の記中に見えてゐる。斯く自分極にうのぼれ切つてゐる使節の目に米國の下院がどう映じたかといふと、これも隨員の記中にあるが、使節は先づ輕侮の目を以つて議長を見た。議長の服裝は日本の仕事師そつくりで、股引を穿ち筒袖を着てゐると、眞面目に觀察してゐるなどは抱腹絶倒であるけれども、外國の風俗を始めて見たものには無理もないとは云ひ、今から思ふと意外とも云へよう。彼理の船ガレが日本に來た時、幕閣の重臣は皆な招かれて、船に入つて饗應を受ける事となつた。矢張り其際も古風の禮服を着用したのだが、黒船を始めて見た連中には船内の事など想像もつかぬ。船の法として、大賓を迎へる時にペンキを塗り替へる

ことや、船中には大きな鏡が装置されてあることや、西洋料理のエテケットなどは勿論知る筈もなかつた。そこで外國の事に通じてゐる通詞は、失體のないやうにと、船の入口に奉書紙に三ヶ條の注意書を大書して貼りつけた。其第一は、ぬり立てのペンキに禮裝の觸れぬやう注意すべし。第二、鏡に頭を撃ちつけぬやう用心せよ。第三、饗應の食物を紙に包むで持返る莫かれと云ふ三ヶ條であつた。これは曾つて故前島男爵より聞いたことで、如何にも人を愚弄するに近い注意書であるが、當時にあつては尤も機宜に適したものであつた。こんな事も、文化の進んだ今日から思ふと、意外の感なきにあらずである。

大隈老侯の傳記を編纂するに方り、意外に感じたことは、侯の長い生涯に各所から寄せて來た書簡が悉く保存されてゐた事で、或る年度迄の分はよく整理され、目錄まで出來てゐたなどは全く案外であつた。此事は別項「手紙保存のすゝめ」にも言うたが、扱て萬餘の手紙を取調べて意外に感じた手紙は、五代友厚氏から侯に寄せたものであつた。五代氏は薩摩出身で、大臣格の人物であつたが、早く官海を去つて大阪で事業の經營に當り、間接に國政に與つてゐたことは、氏の書簡二三百通のどれを見ても國政に觸れてゐないもの、無いのでも推測される。

爰に氏の書簡に就て意外に感じたのは、どの手紙にも必ずず劈頭に「例之五ヶ條御忘れ被下聞敷候」とあつて、友厚と署名し大隈殿とある。幾十通見ても同じことで、これが幾んど一つの形式となつてゐる。勿論本文にはいろいろの事が書かれてゐるが、用向きの書かれてゐる所は本文と云はんよりは寧ろ副書そへがきで、前文が本文であるかの形式となつてゐる。私は最初これを見て、「例の五ヶ條」とは何であらうかと思案に暮れた。何れ五ヶ條の本體があるに相違ないと、小半日もかゝつて多くの手紙を翻して見ると、果して見當つた。それは別紙に細書してあつて、大隈侯の缺點が五ヶ條列記されてあり、各條に多少の注脚がある。侯は晩年と違ひ當時は覇氣満々で、往々圓滿を缺く爲めに人の憤怒を買ふやうなこともあつたので、五代はそれを憂ひて苦言を呈したのである。流石に五ヶ條とも肯綮に當り、其緒言には、貴下の如き顯要の地位にある人に對し、何人と雖も其闕點を摘發する者は無からうが、これは御懇意に任せての婆心と諒察あつて、反省されたいといふやうな、友情の籠つた文言がある。其の幾百十通の書簡に、例として五ヶ條を云々してゐるのは此の別紙から來てゐるので、五代が如何に侯の反省を促すに深切であつたかば想像に難からぬ。五代は確かに侯の知己であつたのである。

三七 斯氏の哲學書 油田の診察

一時ハーバート・スペンサーの著書が日本に流行して、其の多くの哲學書が盛んに讀まれた。スペンサーは意外な愛讀者を意外な國に得たので意外な感を起し、當時工部大學にダイアルと云ふ教師がゐたのをたより、スペンサーより遙かに書を寄せて云ふには、日本で余の著書が大に行はれて居ると聞かざるに驚くべきことである。日本人が余の哲學を理解し得るは何故であらうか。希はくは其理由と事情を知らせて貰ひたいと云うて來た。長谷川泰氏等がダイアルより此の質問を受けたので、答へて云ふには、日本人は儒教の薰陶を受けて居るから、先天的に哲學を理解する力を有して居る。且つ哲學書を讀んで樂むの風がある。さればカントの哲學でも青年の學生が容易に解する。スペンサー位の哲學を解するに何の難きことがあらうと。これを以てスペンサーに復せしめたといふが、スペンサーも定めて驚いたであらう。

長谷川等は多少法曝を交へて地歩を保つたのを、其後端なく日本の爲政家が意外なことをやつて、折角保つた地歩をメチャクにした。其の次第は、往年歐化主義の盛んであつた頃であ

つた、鹿鳴館で内外の男女が互ひに擁して踊つたり、假裝舞會が催されたりして、内外離婚の氣運が漸やく萌して來た時、吾が爲政家は、人もあらうに、此の哲學者に離婚の得失を尋ねた。スペンサーの答は、優等の人種と結婚すれば劣等人種が負けるとあつて、進化の純理から黄色人種を侮辱したので、吾が爲政家も恐縮したが、斯る質問も畢竟スペンサーを崇信する餘りに出たことであらうが、それ式のことを政府が質問するなどは滑稽千萬で、今から思ふと案外の事と言はねばならぬ。

徳川氏の末造から維新に移り替はる頃、外人は何でも知つてゐるものであるかの如く思つて、専門外の事を質したり或は其の指導を受けたりして、失敗を招いた滑稽も少なくなかつた。文久年間に我が郷里越後に意外の事があつた。私の郷里には、古くから石油の賣出してゐる所がある。それは黒川くろがわといふ所で、地名も石油から來てゐるのだが、當時はまだ石油のことは分らなかつた。茲に村松濱の素封家に平野才之丞といふ人があつた。脚疾を患へて困つた擧句、或る人の勧めに依り、長崎まで立越して米國人の名醫の治療を受けることになつた。一ヶ月許り滞在して此の米國人と交つてゐる内に、郷國の油に就て質問を試みると、それは多分べ

トロレアムであらう。米國の富も實は此の油が多量に出るからだと聞いて、平野は此人に實地の検査を頼み、それが否かを確かめたいと思つて切にそれを請うた。當時長崎から越後へ回航するに汽船もない時であつたのみならず、外人を内地に旅行させることも容易に出来なかつた。流石に平野は膽略と實力があつたので、一外人を新潟へ回航せしむるため、六萬圓を投じて一汽船を買入れ、又當路に種々の運動をして、此外人を越後内地に旅行せしめ得る特許を獲たが、其の特許は二日間と限られた。元來新潟より黒川までは、徒歩では一日に行き兼ねる距離である。そこで平野は迅速に往復せしむる爲め、人力車を工夫し、之れを曳き之れを推すに數人の力を以てし、辛うじて目的を達し、特許の時間内に外人を船に歸らしむることを得た。此検査の結果、果して黒川の賁油が所謂の石油であることが分明し、採掘に就て多少の指導を受けたので、それからは可なりに油を得ることになつたが、醫師に石油の診察を乞うたのも意外、此爲めに六萬圓を投じたのも、人力車を急造しのため、皆な意外と云へば意外である。